ハンガリーの軍事介入参加（一九六八）　－カーダール・ヤーノシュと「プラハの春」

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>萩野 晃</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>法と政治</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>□</td>
</tr>
<tr>
<td>ISSN</td>
<td>□</td>
</tr>
</tbody>
</table>
ハンガリーの軍事介入参加（一九六八）

かつダール・ヤーノシュと「プラハの春」

荻野晃

一、はじめ

冷戦期のハンガリーにとって、一九六八年は激動の年であった。国内では、ソ連型社会主義経済に市場原理を取り入れた経済改革が実施された。さらに、ハンガリーは隣国チェコスロヴァキアにおける自由化の動きは八月二一日のワルシャワ条約機構五か国軍事介入によって頓挫した。ハンガリーのチェコスロヴァキアへの軍事介入参加に関して、冷戦終結以前の欧米諸国での研究では、ハンガリー社会主義労働者党第一書記カダール（Kádár János）は他の東欧諸国の指導者たちと異なり、「プラハの春」に好意的に対応した。軍事介入に否定的であったことが指摘されてきた。また、ハンガリーはソ連との対立を回

815 法と政治 63 巻 4 号（2013年1月）
避るため、下本思想ながら介入参加に踏み切ったとみられた。

冷戦終結後に公開された社会主義労働者党の文書を検証したハンガリーの歴史家ヴィダ（Vida István）の研究
では、次の三点が指摘された。一、チェコスロヴァキアで改革が始まった当初から、カーダールや社会主義労働者指導部は改革の急進化を懸念していた。二、カーダールはチェコスロヴァキアをめぐる危機の（武力による
決定をする以前に、カーダールはソ連にチェコスロヴァキアの軍事介入に反対していなかった。三、ソ連が軍事介入
の文書を検証し、カーダールがハンガリーの特性をかかえたのは違いないとの結論を示した。その後、一九六八年のチェコスロヴァキア情勢への対応については、ハンガリーの歴史家フサル（Huszár Tibor）は経済改革など自国の特
性と社会主義の原則との間のカーダールの面的な政治姿勢に着目した。筆者自身、かつて社会主義労働者党
が公刊資料を含むさせて検証することの必要性を実感した。さらに、一九六八年の軍事介入への参加が一九五六
年以降のハンガリー外交においていかに位置づけられるかを再考することも、今後、筆者がカーダール時代のハンガリー外交の二元的特徴・具体的にはソヴィエト・ブロックの利益としてのプロレタリ
に形成されてきたハンガリー外交の一元的な特徴。
ア国際主義の原則への忠実さ、自国の特性や利益を擁護するためのプラグマティズムの二点に着眼する。そして、

第二「プラハの春」とソヴィエト・ブロック

一九六八年一月、チェコスロヴァキアで共産党第一書記ノヴォトニ（Antonín Novotný）が退陣に追い込まれ、

新しい党指導部の発足後、チェコスロヴァキア共産党は検閲の廃止など新たな政策を打ち出すことになった。

ドゥブチェクの第一書記就任から一週間後の一月二〇日、カーダールはドゥブチェクと会談した。ドゥブチェクはカーダールに過去の不当な裁判による犠牲者の名誉回復、経済問題、ソロヴァキアの問題などの政策課題について語った。また、ドゥブチェクはチェコスロヴァキア共産党の将来の新たなプログラムの起草についても語った。

党指導部の統一の重要性を論じた。そして、カーダールはチェコスロヴァキア共産党の将来の新たなプログラムの起草についても語った。カーダールは「人民をまとめる党が分裂していれば、人民は束縛されない」と述べて、ドゥブチェクに意見もあった。ソ連や他の東欧諸国との対話の必要性をカーダールは説いたのである。

二月四日にも、カーダールはドゥブチェクとスロヴァキア南部のハンガリーの国境に位置するコマールノで

ハンガリーの軍事介入参加（一九六八）
論

説

が危険であるとカーダールは認識した。二月六日の社会主義労働者党中央政治局の議事録から、カーダールがドゥプコモーチュ（Komočín Zdeněk）がチェコスロヴァキアの労働者階級は高度な能力を有していると述べた。さらに、ドゥプコモーチュは西ドイツとの通商代表部の設置、チェコスロヴァキア共産党の行動綱領の内容について言及しなかった。また、カーダールは二月四日の会談でドゥプコモーチュにチェコスロヴァキア共産党内部の下から改革の動きに注意すべきと述べた。

二月八日から一日、開催された社会主義労働者党中央委員会で、国内共産主義運動担当の党中央委員会書記、チェコスロヴァキア共産党指導部の交代に関する経緯、チェコスロヴァキアの経済問題、チェコ人とスロヴァキア人の関係、ソ連や他の社会主義諸国とチェコスロヴァキアとの関係、一月二〇日と二一日、二月四日のカーダール・ドゥプコモーチュ会談について報告した。さらに、カーダールがコモーチュの報告については詳細な補足説明を行った。カーダールは「チェコスロヴァキア共産党は力強く歴史ある党であり、ヴォリトニーは誠実な一人だった」と語った。

カーダールはドゥプコモーチュへ支持表明と同時に、隣国での事態の急進化に注意を促したのである。

チェコスロヴァキアで検閲が廃止され、国内の改革へ向けた行動綱領の作成が始まるとき、ソ連や他の東欧諸国は危機感を抱いた。とくに、チェコスロヴァキアの隣国ボーランド、東ドイツは、チェコスロヴァキアの自由
819 诗与政治
63卷4号
(2013年7月)
В 60-х годах в его правление было подготовлено решение об институционализации колхозного строительства в стране, которое не только способствовало экономическому росту, но и укрепило позиции КПСС как доминирующей политической организации страны. Государственное управление стало укрепляться, экономический рост и социальное развитие страны продолжались. В 1965 году Леонид Ильич Брежнев назначается председателем Совета Министров СССР. Это был важный шаг вперед, который дал возможность усилить контроль над экономикой страны и ускорить ее развитие. В то же время, это приводило к увеличению социального неравенства, что вызвало критику со стороны сторонников более демократических реформ. Тем не менее, Брежнев продолжал руководить страной до своего ухода в 1982 году.
民議会議長スマルコフスキー（Josef Smrkovsky）を名指して非難した。カーダールはチェコスロヴァキアに露骨に敵対的な態度を取った。

プレジネフはチェコスロヴァキアを解放したのであり、チェコスロヴァキアにおける社会主義の成果を擁護する必要があると述べた。中央委員会書記コルデル（Drhmir Koller）は自国内反革命状況が存在しており、措置を講じることの必要性を述べた。それに対して、首相チェルニク（Oldrich Cernik）は自国の現状を進歩的で親社会主義的でないと述べた。

ソ連や他の東欧諸国の首脳がチェコスロヴァキアを激しく批判する中で、カーダールはチェコスロヴァキアの党指導部の考えを知るために、真のチェコスロヴァキアの状況を理解する必要があると述べた。また、ハンガリー首相フォック（Ferenc Jozsef）は、チェコスロヴァキアの内政に干渉するコミュニカの採択に反対した。しかし、同時にドレスタンでカーダールは「チェコスロヴァキアの情勢が一九五六年事件の序盤というべき」と述べた。社会主義の原則に忠実な一面をみせた。
The text on the page appears to be in a language that uses a variety of scripts, including Devanagari, Persian, and Sanskrit. The text is dense and features a mix of alphabets and characters. It seems to be a scholarly or academic text, possibly discussing scientific or philosophical topics. Without more context, it's challenging to provide a precise translation or interpretation.
无法读取或识别文档内容。
モスクワ会議後の、社会主義労働者党政治局内でも、ソ連がチェコスロヴァキア情勢への対応をめぐってハンガリーに不信感を持っているとの懸念が広がっていた。五月二四日の政治局の協議では、表立ったソ連との論争をひかえることが決定された。にもかかわらず、ソ連とハンガリーの認識の相違は確定に大きくなってしまった。五月二八日の協議で、政治局は中央委員会国際部によって作成されたチェコスロヴァキア情勢に関する報告書を黙認することに決まった。報告書では、修正主義者、守旧派、右派からなる社会主義の小協同を必要とすることを提案してある。}

ソ連共産党は武力行使の準備を進めつつも、同時にチェコスロヴァキアとの話し合いによる問題解決を模索してハンガリーの軍事介入を避けようとしたが、駐ハンガリー・ソ連大使ティトフは、経由で緊密に連絡を取っており、両者の信頼関係は崩れていない。
いった。ソ連共産党内部にも、武力行使に慎重な意見が存在したのである。当時、ドゥブチェクをはじめとするチェスロヴァキア共産党指導部は、カーダールの存在を無視できなかった。五か国の中で、ハンガリーが完全に孤立していたわけではなかった。

カーダールの存在を無視できなかった。六月一日、ドゥブチェクが二国間の友好相互援助条約の更新のためにハンガリーを公式訪問したが、ドゥブチェクの右翼勢力、修正主義の危険に対処するよう求めることが記されていた。報告書には、ドゥブチェク指導部の政策への支持の一方で、ドゥブチェクに右翼勢力と呼ぶべきではないとしている。しかし、政治局員の間では、チェスロヴァキア共産党指導部が報道機関を掌握できていないことへの懸念が拡がっていた。

カーダールとドゥブチェクの首脳会談では、ハンガリー・チェスロヴァキア両国間の連帯が確認されており、表面上、両者の信頼関係を維持されていた。しかしながら、実際には、首脳会談の席上でカーダールがドゥブチェクにマスコミへの統制の強化を求めていたことが明らかになっており、両者の間で意見の相違があった。
論
『ネーブサバッチャーグー』紙上の反論は、『リテーラルニ・リストイ』の記事のみならず、記事の掲載を止めなかったチェコスロヴァキア共産党指導部への警告でもあった。これまで、ハンガリーのマスコミはチェコスロヴァキアへの批判をひかえていた。『リテーラルニ・リストイ』の記事への反論を契機に、ハンガリーのマスコミはチェコスロヴァキアへの批判をひかえている。一九五六年当時のナジの路線を否定することで権力を掌握したカーダルにとって、ナジの再評価や名誉回復は自らの政権の正統性そのものの否定を意味したのである。六月一九日から二〇日に、社会主義労働者党中央委員会の協議会に関する六月二一日付けの『ネーブサバッチャーグー』の報道では、ドゥブチェクのハンガリー訪問の成果として、二国間の友好関係が強化されている。しかし、冷戦終結後に公開された党中央委員会の議事録から、一九五六年二〇日、社会主義労働者党中央委員会のチェコスロヴァキアに対する認識が変化していたことが確認できる。チェコスロヴァキア中央委員会のチェコスロヴァキアの姿勢に対するハンガリーの姿勢が、以前よりも社会主義イデオロギーやプロレタリア国際主義の原則に忠実な方向へシフトしつつあった。
（Vladimir I. Lenin）のマルクス主義解釈に異議を唱えたチェコスロヴァキア共産党中央委員会書記ツィーサン（Cestmir Cisát）を批判した。コモーチンとカーダールの発言に対してレーヴェース（Révész Geza）が「われわれの主たる敵は修正主義である」と述べるなど、チェコスロヴァキアに強硬な姿勢でのぞき、「という発言も表しました。一方で、ノーグラーディ（Nagrii Sándor）は武力行使を含めたチェコスロヴァキア情勢に対する意見の相違はみられなかった。ドルチェク指導部は「二正面闘争」を求めているなど、従来の社会主義労働者党の立場が確認されたものにかわらず、政治的な自由化を伴ったチェコスロヴァキアの改革が、ソ連や他の東欧諸国のものならず、党の指導的役割を堅持しながら穏健な経済改革を進めるハンガリーにとっても脅威になると、社会主義労働者党指導部による「千語宣言」が発表された。『千語宣言』の発表により、プラハの春はチェコスロヴァキア共産党の改革であるという改革の推進を求め、スロヴァキアの作家ヴァツリク（Václav Čapra）など、党外の有識者によって、いつそうの改革の推進を求めたものはまでもない。六月三日に駐チェコスロヴァキア・ブルガリア大使ネデルチェフ（Stigam Neđelčev）が本団宛てに送った報告書には、もれなくチェコスロヴァキア共産党の健全な勢力が介入しなければ、社会主義に好ましいハンガリーの軍事介入（九六八）
の利益とは異なる。自国の利益の追求が始まっていた。近年のハンガリー外交史の研究動向から、一九六○年代に入り、ハンガリーが一九五六年の軍事介入によって悪化したアメリカとの関係の改善を模索したり、ソ連の对外戦略に抵触しない範囲でオーストリア、フランス、西ドイツ、イタリアなど西欧諸国との関係強化をはかったりしたことが指摘されている。一九六三年以降、対米自立を志向するフランスが東欧諸国との関係強化を模索していた。ハンガリーも一九五六年以後の国際的孤立からの脱却をはかる好機を捉え、フランスののはたらきかけに応じる姿勢をみせていた。実際、一九六八年三月二九日にフォックスはフランスを訪問し、ド・ゴール（Charles de Gaulle）大統領と国際情勢について協議していた。また、一九六八年七月の議会で、ハンガリー外相ベーテル（Péter János）は同年九月のフォックス首相のオーストリア訪問が两国間関係の強化にとって重要であると述べていた。対のハンガリーの軍事介入によってチェコスロヴァキアの経済改革への風当たりが強まることが予想された。さらに、チェコスロヴァキアへの軍事介入が欧米諸国の反発を招き、ハンガリーの外交努力にも少なからず影響すると考えられた。当時の社会主義労働党指導部には、チェコスロヴァキアへの軍事介入が自国の経済改革に及ぼす影響について二通りの見方が存在した。ハンガリーの外交史研究者ベーチェシュ（Békes György）は論じた。まず、第一点目として挙げられるのは、チェコスロヴァキアの改革のみならず、ハンガリーの経済改革も順当に行えない大幅な後退を余儀なくされることである。第二点目として挙げられるのは、チェコスロヴァキアの改革とハンガリー改革を継続できるという見方で、ハンガリーの軍事介入参加（一九六八）
多言も少言も、勿論本的に取扱
にて自らが如何なる利益を
招く事が出来られるか、他に
誰よりもより時に考える事も

まことに重い事にして、

余りに難解なることか。
治局に報告書を提出した。報告書には、「シュマヴァ」の目的として、チェコスロヴァキアに対するワルシャワ条約機構の力と結東のデモンストレーションと警告、チェコスロヴァキア情勢を市場する意図。演習参加国、組合、統制、協力を可能にすることが述べられていた。さらに、演習の終結、撤退の時期が明確にされないことは、チェコスロヴァキアの不満を無視していること、とくにソ連軍司令官たちのふるまいがソ連、ワルシャワ条約機構の権威や名声に有害であるとオラーとスーは指摘した。

ハンガリーは、チェコスロヴァキア情勢が緊迫化する中、プラジェネフは七月五日のハンガリーの不連、東欧首脳会談に出席することを提案した。しかし、多国間協議が自国にとって不利だと判断したドゥプチェクは、プラジェネフの要求を拒否した。そして、ドゥプチェクはチェコスロヴァキアに対する多国間の首脳会談に出席しないことを決定した。七月八日、チェコスロヴァキア共和国中央委員会幹部会は、ソ連・東欧諸国による多国間の首脳会談に出席しないことを決定した。七月九日から一日に、ハンガリー・ソ連間でチェコスロヴァキア情勢に関するメッセージのやりとりがあっ

839 法と政治 63巻4号 (2013年1月)
た。チェコスロヴァキア共産党指導部が七月八日の決定を覆し、多国間の協議に厚意であるとの意見決定に時間を使えぬべきだと、カーダールはプレジネフに提案した。しかし、ドゥブチェクが党指導部内での守旧派を一掃する事態を懸念したプレジネフは、カーダールの提案を受け入れなかった。

七月二日の社会主義労働者党中央機関を通過するために時間を使えぬべきだと、カーダールはプレジネフに提案した。しかし、ドゥブチェクが党指導部内の守旧派を一掃する事態を懸念したプレジネフは、カーダールの提案を受け入れなかった。

プレジネフは、早急に多国間での協議を開くべきだと返答した。カーダールはプレジネフへの非難の声が高まっていた。政治局は「チェコスロヴァキア共産党中央委員会幹部会が話し合いを求める兄弟党の提案を受け入れなかったことは重大な誤りである」と決議した。しかしながら、二日目の協議では、政治局はチェコスロヴァキアの危機を軍事力ではなく、話し合いによる解決を求めるという七月一四日にワルシャワで開催されるソ連・東欧各の首脳会談におけるハングリの立場について決議した。

七月二三日、スロヴァキアとの国境に位置するハンガリーのコマーロムでカーダールとドゥブチェクが会談した。カーダールはドゥブチェクの提案を受け入れなかったことを、カーダールはドゥブチェクはあくまで各国との国境間協議の形式に固執して、カーダールの説得を受け入れなかった。カーダールはドゥブチェクは、「すぐに進みたいのか」と述べた。さらに、カーダールはドゥブチェクに「どこに進みたいのか」と述べた。
に来ただけだったと述べている。七月一日のワルシャワ会談で、カーダールがドゥプチェクとの会談の結果を報告している点から判断して、ドゥプチェクが述べたように、プレジデントがカーダールにドゥプチェクと会うよう指示していたとも考えられる。

さらに、カーダールとドゥプチェクとの間では、チェコスロヴァキアがワルシャワ会談への出席を拒否した場合に起こりうる事態に関して認識の隔たりがあったことは間違いない。いずれにせよ、ドゥプチェクがカーダールの説得を拒んだことで、ハンガリーによるソ連・チェコスロヴァキア間の調停は不調に終わった。そして、チェコスロヴァキアでの事態が反革命に近づいていることをカーダールも認めた。}

841 法と政治 63巻4号 (2013年1月)
比較すれば、カーダールとゴムルカの間での意見の隔たりは小さくなっていた。にもかかわらず、カーダールの
チェコスロヴァキアの反革命の危険についてはの見解は、ゴムルカのそれとは異なっていた。カーダールは「チェコ
スロヴァキアで反革命は勝利していない」（チェコスロヴァキア共産党の経済構造についての見解は、ゴムルカのそれとは異なっていた。カーダールは「チェコスロヴァキアで反革命は見出せない」と述べた。
さらに、チェコスロヴァキア共産党内での組織改革の必要性も指摘している。カーダールは「チェコスロヴァキア
共産党は自力で問題を解決する立場でなくなるべきかカーダールは明確に示さなかった。

ワルシャワ会談では、ウルブリヒトは「千語宣言」の公言によって「チェコスロヴァキア共産党は自力で問題を解決する立場でなくならない」と述べた。さらに、ウルブリヒトは「千語宣言」という文書に係わる西ドイツ、アメリカ、英仏などの日本国内のカーダールに対する批判を受けて、ハングリーの知識人にはたらくべきである。]

ア・ルマニア・チェコスロヴァキアの「小協商」の再現に言及し、カーダールの現状認識を激しく批判した。そ
して、ウルブリヒトはチェコスロヴァキアの共産主義者たちがハンガリーの知識人に係わるべきである。}

ジフコフは「アメリカ、西ドイツの帝国主義者に操られたチェコスロヴァキアの反革命的勢力は明日さらに増
加しており、問題の限界を越える」と述べた。そして、ジフコフは「アメリカ、西ドイツの帝国主義者に操られたチェコスロヴァキアの反革命的勢力は明日さらに増加しており、問題の限界を越える」と述べた。
フロフはこれまでと違う方法、具体的にはワルシャワ条約機構によるチェコスロバキアへの支援に言及した。

攻撃の危険がみられると分析した。そして、プレジネフはソ連共産党、ソ連政府、ソ連人民はチェコスロバキア政府のチェコスロバキア情勢への評価に関して、カーダールは反革命のブラットフォームと規定した。さらに、ワルシャワ会議の後、ソ連はチェコスロバキアとの二国間協議の開催を検討する一方で、軍事介入の準備を進めている。七月三日にソ連共産党政治局はチェコスロバキア領内にワルシャワ条約機構軍を配備し、そのまま国内を制圧する作戦を計画に命じた。

オーストリアの軍事介入参加（26）

ハンガリーの軍事介入参加（26）

843 法と政治 63 巻 4 号 （2013年1月）
ฉบับพิเศษ 63 ฉบับ (2013 ฉบับ)
の政治局員に、最終的にはハンガリーを軍事介入に参加させる意思を明らかにしたのである。政治局内部には、カーサールの発言に異論を唱えるもののはいなかった。政治局員の多くは、ソ連・チェコスロヴァキアに二国間会談の結果に期待していたのである。実際に、七月二三日には、社会主義労働者党政治局がトゥタリノフからのハンガリーの軍事演習参加の要請に応じる決定を下していたとのことだが、同日のブレジネフとカーサールの電話会話にそってブレジネフは軍事演習への参加を承認したカーサールに「君の返書から確認できる。また、電話会談の中で、ブレジネフは軍事演習への参加を承認した」とは決して忘れないと礼を述べていた。

さらに、七月二四日には、チェーニクがソ連からプロヴァロフ（Konstantin Provalov）・トゥタリノフ・マルシューチ（Tatro Pirozniev）の三人の将軍の訪問を受けた。三人はチェーニクに前日のハンガリーの演習参加の表明に謝意を表したが、チェーニクは軍事演習に参加する提案は再三の内閣会議で決定したと解答した。軍事演習への参加を促すものであることを、政治局員全員が理解していたことは間違いない。軍事行動に関する重要な決定であるが、政治局は公式な協議の場での議題として、議事録に残らないよう秘厳裏に決定したと考えられる。いずれにせよ、社会主義労働者党政治局はハンガリーのワルシャワ条約機構の軍事演習への参加を承認すること二三日のトゥタリノフからのメッセージがハンガリーの軍事演習への参加を促すものであることを、政治局員全員が理解していたことは間違いない。軍事行動に関する重要な決定であるが、政治局は公式な協議の場での議題として、議事録に残らないよう秘厳裏に決定したと考えられる。
論

説

とによって、事実上、ハンガリーのチェコスロヴァキアへの軍事介入への参加の意思をソ連に示した。ハンガリーの軍事介入への参加は、社会主義労働者党政治局の文書が公開される以前の先行研究で論じられたよりも早い段階で、しかも大きな論争もなく、政治局内部で合意に達していたのである。

五、軍事介入への参加

七月二九日から八月一日のチェコスロヴァキア東部のソ連との国境に位置するチェルナ・ナド・ティソウにおけるソ連・チェコスロヴァキアの首脳会談で、チェコスロヴァキアへの軍事介入は回避された。プラチスラヴァで採択された共同声明に「各国民の意思の国際的義務である」と明記された。共同声明の採択によって、チェコスロヴァキア共産党に課された「国際的義務」であると、ソ連や他の東欧諸国は捉えられた。ここで、この状態に対し、チェコスロヴァキアの破壊活動に対応する共産主義の結集。

a．「帝国主義の破壊活動」に対する共産主義の結集。

b．社会主義の成果を守衛する国際的義務。
c、共産党的指導的役割が攻撃され、特別な警戒が必要なことを認める。

d、アメリカ、西ドイツ、イスラエルへの批判の文脈で調和した外交活動への合意。

e、西ドイツの報復主義者により高められた緊張に対してワルシャワ条約機構の政治、軍事協力の強化。

他方、ドゥブチェクはプラチェンヴァー共同声明に「主権の尊重」領土の不可侵」「国家の独立」などの文言が盛り込まれたことを評価していた。六か国の共同声明の採択によって、軍事介入が回避されたとドゥブチェクは判断した。

なお、ドゥブチェクはチェルナ・ナド・ティソウ会談においてプラチェンヴァー会談で、共同声明以外に連

央委員会幹部会の声明では、一戦の会談について「あらゆる参加国の代表団の共同の成果であり、マルクス

レーニン主義とプロレタリア国際主義のもとでも、友党と社会主義国家間での相互の利益促進のための新たな

契機」と楽観的な評価が述べられていた。また、ソ連から党による統制の強化を求められたマスメディアについ

て、中央委員会会幹部会は「事件とくに外交に関する報道やコメントの際、新聞、ラジオ、テレビで労働者にチェ

コスロヴァキア人民および国家の国内的かつ国際的な利益に考慮し続けることを期待する」と、ひかえ呟き警告

にとどめた。

アメリカの政治学者ヴァレンタ（Valenta）が指摘したように、プラチェンヴァー共同声明によるチェコスロ

ヴァキア情勢の沈静化は、ソ連共産党およびワルシャワ条約機構加盟国の内部の軍事介入への主唱派と懐疑派と

の間で合意が形成されなかった結果に過ぎなかった。実際に、プラチェンヴァー会談で軍事介入への可能性がなく

ハンガリーの軍事介入参加（九六八）
述べていた。

さらに、八月七日の党中央委員会で、カーダールはチェコスロヴァキアとユーゴスラヴィア・ルーマニアの連携に懸念を示した。実際に、八月九日にユーゴスラヴィア大統領チトー（Josip Broz Tito）、八月二十三日にルーマニア大統領シェフェスク（Nicole Ceausescu）がチェコスロヴァキアを訪問した。ブラハでチトーはチェコスロヴァキア共産党の路線に理解を示し、シェフェスクは内政干渉に反対する姿勢を示した。後述するように、両者の訪問が、ブラチスラヴァ会談の後の「招かれざる客」を招かざる客」としてチェコスロヴァキアへ到着したハングガリー情勢への不信感を増幅させたことは明らかである。党中央委員会でカーダールは、ハングガリー情勢に関するソ連・東欧諸国の公文書の発表について、両国間の関係が悪化する見通しを示した。ハングガリーは、ハングガリー情勢の評価において、ソ連の立場を批判した。したがって、ハングガリーは党中央委員会に報告した。党中央委員会の間では、フォドル（Fodor György）がカーダールの意見に賛同した。
Sándor) टोम्पे (Tömpe István) समूह के अंकित के लिए यात्रा की है। शारीरिक रूप से नहीं है। वह यात्रा की है। यात्रा की है। वह यात्रा की है। वह यात्रा की है। वह यात्रा की है। वह यात्रा की है। वह यात्रा की है। वह यात्रा की है।
したことが重要な契機になったことは間違いない。一日目の電話会議で、ブレジフェンはドゥプチェクにチェルナ・ナド・ティソウ、ブラチスラヴァで合意した義務の履行、反社会主義勢力の取り締まり、毎日、反ソ、反党の記事を掲載していると『レラールニ・リスティ』ムラダー・フロンター『レボルテール』ブラーツェに述べたと述べた。ブレジフェンは「話し合ったかどうかではない。」と述べた。ブレジフェンはドゥプチェクは記事の内容に反対であり、報道スタッフと話し合ったのを述べた。ブレジフェンはドゥプチェクが履行するつもりだが、党中央委員会総会で一〇日以内に党中央委員会総会を招集する用意があると言ったわけではない」ことと指摘した。ドゥプチェクは八月中には招集できないと述べた59。ドゥプチェクが義務の履行を故意に遅らせているとブレジフェンは受け取った。さらに、ブレジフェンの強硬な姿勢に狼狽したドゥプチェクは「われわれがあたがたを欺いていると言ったではないか」と反論した。また、チェルナ・ナド・ティソウ、ブラチスラヴァで合意したとおりにチェコスロヴァキア共産党内の急進改革派であるクリーゲル、ツァー・ザの指導部からの排除、国営テレビの責任者ハリカーイン（Jiri Pelikan）の更迭を迫った。ブレジフェンはドゥプチェクに「われわれがあたがたを欺いていると思うなら、あなたがたが適切だと思う措置を取るべきだ。それはあなたがたの問題だ」と問いただした。電話会議の結果、ドゥプチェクにチェルナ・ナド・ティソウ、ブラチスラヴァで合意した内容を逐行する意思などないとブレジフェンは判断したのである。

八月一日をもって一度、ブレジフェンはドゥプチェクにチェルナ・ナド・ティソウ、ブラチスラヴァで合意のハングリーの軍事介入参加（「九六」

二七
ていた。さらに、クリミアでソ連の指導者たちはカーダールにもう一度、ドゥプラチエクと話をしてみるよう促し
た。冷戦終結後にソ連・東欧で文書が公開される以前、八月一日のコマール会談に関し、クリミア滞在中
に軍事介入の可能性が高まったことを察知したカーダール自身が、危険が迫っていることを遠回しに警告す
るためドゥプラチエクとの会談を申し入れたとみられている。また、八月七日の時点で、ドゥプラチエ
クの電話会談の内容つまりエコソロヴァキア側による合意の不履行について詳しく知られていた。また、プ
レジネフは軍事介入の意思を固めたことを、クリミア滞在中のカーダールに知らせていたのである。
さらに、繰り返しになるが、プレジネフがカーダールにドゥプラチエクと会うよう促していたことは、八月
二〇日の社会主義労働者党政治局の議事録からも明らかになっている。クリミア滞在以前の段階で、カーダール
自身の判断でドゥプラチエクに参加させる意思を固めており、もはや自発的にドゥプラチエクと会って介入の可能性
についてのめかすとは考えられなかった。

ハンガリーの軍事介入参加（二九六）

853 法と政治 63巻4号（2013年1月）
プチェクに一度、ソ連指導者と話し合うこと、党の指導的役割の強化、反右翼闘争の開始を求めた。しかし、
他方、チェコスロヴァキア側の資料には、どのような点が述べられているか。
レジネフはハンガリー・チェコスロヴァキア首脳会談を有益だと捉えていた。
デュプチェクはカーダールの説得に応じなかった。

国内情勢はワルシャワ会談前より複雑であっても将来の反党の立場の変化があった。また、
プラチスラヴァ共同声明に関しても、チェコスロヴァキアの立場が変化しておらず、
両国資料を突き合せた結果、冷戦終結以前に考えられたような、カーダールが自らの意でソ連・チェコス
ロヴァキア間の最後の調停を試みたとするコマール会談の選択的な位置づけは成り立たない。
共同声明で採択されたプラットフォームを強化
すべきとカーダールは主張した。

他方、党の指導的役割の強化、反右翼闘争の開始を求めた。しかし、

ハガリーノ軍事介入参加（1988年）

ハンガリーのチェコスロフアキアへの軍事介入の要因について、冷戦終結以前の研究では、ハンガリーはソ連

ソビエト連邦のチェコスロフアキア情勢への対応は、ソビエト・ブロック内部での軍事介入回避の試

ソビエト・ブロック内部の動揺の際で、カーダールはあくまでも社会主義イデオロギーの原則に満足であっ

ソビエト・ブロックの最終的な決定に従う意思を表明したカーダールを信頼し、独自のロシアへののはた

明に至ってソ連共産党政治局が最終的にチェコスロフアキアへの軍事介入の決定を下した後、カーダールはハン

ハンガリーのチェコスロフアキア情勢への対応、ソビエト連邦の軍事介入回避の試

ソビエト連邦のチェコスロフアキア情勢への対応、ソビエト連邦の軍事介入回避の試

ソビエト連邦のチェコスロフアキア情勢への対応、ソビエト連邦の軍事介入回避の試

ソビエト連邦のチェコスロフアキア情勢への対応、ソビエト連邦の軍事介入回避の試
との対立を回避するためやむなく介入参加に踏み切ったと論じられた。しかし、現実には、チェコスロヴァキアの改革が始まった当初から、カダールは事態の急進化を懸念していた。また、社会主義労働者党指導部は、ソ連や他の東欧諸国と異なる姿勢をとったのは、チェコスロヴァキアの改革に好意的であったからではなかった。

確かに、一九六八年一月に経済改革を実施したハンガリーにとって、ソ連でも改革路線が形成されたからではなかった。自国と同様に党の指導的役割の堅持を前提として、新指導部の発足以前の過ちを正すための国内改革路線であっ

そこで、ハンガリーは軍事介入に慎重な姿勢

紛乱の魅力にソ連に従ったがソ連を論じた。実際に、ハンガリーは軍事介入において生じる自国の内政や外交への悪影響を懸念し、介入に慎重な姿勢を取り続けた。さらに、カダールは軍事介入によって生じる自国の内政や外

プロペラ・ドップチェク会談が不調に終わると、チェコスロヴァキア共産党が自力で問題を解決できず、国内外で大論を試みた。しかし、ドップチェックはカダールの忠告を聞き入れなかった。七月三日のコマロムでのカ

論

二三

法と政治 63 巻 4 号（2013年 1月） 856
チェコスロヴァキアの自由化が、自国を穏健な経済改革の足きえとして引きずるためのカーダールは危惧した。それ故、カーダールの考えに同意した社会主義労働者党政権は、ソビエト・ブロックの利益のためにチェコスロヴァキアの改革を武力行使で阻止することを決定した。一九五六年にハンガリーを訪問した際、一九五六年の軍事介入当時の駐ハンガリー大使だったKGB議長アンドロポフ（V. N. Andropov）はハンガリーの対応について、ロシアの原則にとらわれず、ブラズマティックに西欧諸国との関係強化を模索するようになっていた。にもかかわらず、ハンガリーはチェコスロヴァキアの対応について、ロシアの事態の進展が、少なくとも短期的にはハンガリーの西側との関係改善の努力を妨げることになる。と分析していた。実際に、軍事介入の後、一九六八年九月に予定されていたフォックのオーストリア訪問は無期延期となった。[10]　

バディが論じたように、ハンガリー－国の反対で軍事介入を阻止することなど不可能であり、カーダールには介入参加を拒否する意思などなかった。だが、ハンガリーが軍事介入の回避に努めたことには、西欧諸国との関係改善の道筋と同様に、国益のためにブラズマティックに対応する側面もみられた。しかしながら、チェコスロヴァキア情勢への対応を通じて、社会主義イデオロギーの原則に忠実なカーダール時代のハンガリー外交のもう一つの側面が浮き彫りとなった。一九五六年一月、カーダールはハンガリー国内


The Prague Spring 1968, pp. 37-41. (Budapest: MDP-MSZMPIratok, 1999.)


Prague Spring 1968 (Budapest: Central European University Press, 2006).
Current Development in Hungary,


Hungary’s Participation in the Military Intervention (1968): János Kádár and the Prague Spring

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine the characteristics of the Hungarian foreign policy since the Hungarian Revolution of 1956. Especially this study is focused on how Hungary coped with the Czechoslovak crisis in 1968.

It was János Kádár, the First Secretary of the Hungarian Socialist Workers’ Party, who grasped power after the Soviet military invasion in Hungary in November 1956. In spite of cracking down on the opposing forces, his regime started to relax its domestic control and to introduce economic reform within the frame of the one-party rule in the mid-1960s. In addition, Hungary sought to establish good relation with Western countries pragmatically to promote the national interest.

During what was called the Prague Spring in 1968, Hungarian leaders expected Alexander Dubček, the First Secretary of the Communist Party of Czechoslovakia, to make a moderate reform without political liberalization. But Czechoslovak leaders could not control the Prague Spring under their control. Kádár supported the Soviet leaders and agreed on the military intervention in Czechoslovakia as a last resort.

However, Hungarian leaders were skeptical about the effects of the military intervention. They were anxious that the military intervention would have a harmful influence on Hungary’s reform and foreign policy. So Kádár tried to mediate between the Soviet Union and Czechoslovakia. But his mediation ended in a rupture, because Dubček refused to make a concession to the Soviet Union. At the same time, Kádár thought that the Prague Spring threatened Hungary’s moderate economic reform and pragmatic foreign policy. Finally, he made a decision to participate in the intervention in Czechoslovakia.

Hungary’s participation in the military intervention was to follow the principle of international socialism. Kádár tried to defend the socialist regime in
Czechoslovakia as interests of the Soviet Bloc, rather than Hungary’s economic reform and foreign policy as national interests.

This paper consists of following sections:

1. Introduction
2. Prague Spring and the Soviet Bloc
3. Hungary and the Czechoslovak Situation
4. How Hungary Coped with the Czechoslovak Crisis
5. Participation in the Military Intervention
6. Conclusion